

「武士道」の幻を追って

中田 喜万

二〇一〇年度の本センター主催による公開授業「比較思想」は、私の担当で、「武士道」の幻を追って」と題して、前期毎週木曜第四時限に行った（四月一五日～七月二二日。全二四回）。教室は、広くて新しい二二二〇一教室である。

開講に際して一般受講者にむけて示した授業概要は、後掲資料のとおりである。一般公開の趣旨を重くみて、広く関心を集めやすそうなテーマということで「武士道」を選んだ。

受講者数は、

- ・一般参加者が、応募者の中から選ばれた定員三〇名、
- ・学生の受講登録者一一五名（うち、七月二九日実施の学期末試験受験者は一〇七名）、

・その他に東京女子大学の関係者、であった。例年と比べて学生の受講がかなり多かったようである。こちらの企図したとおり関心の高いテーマだったからか、それとも担当

教員が柔和でやさしそう（楽に単位をもらえそう）にみえたからか、単に授業時間割の関係によるものか、わからない（もちろん、学生の成績評価は、何の容赦もなく厳正に行った）。いずれにせよ、当初に学生の受講者数をしほらず（しほってよいのか、よくわからなかった）、大教室のまま一般参加者と学生の双方に向けて講義するのは、教員の力量が試されることであった。大教室の後部座席に座る一部の学生の私語（当世の大学生に珍しいことではない）が、意欲の高い一般参加者を当惑させてしまったことも、大変申し訳ないことであった。

授業方法は、前年度の荊部直先生の方式にならない、毎回配布資料にもとづいて講義するとともに、最後に受講者にコメントシートを配布して授業の感想や質問を書いてもらい、それに応答する形で次の授業を始めることにした。

この方法の長所は、受講者の参加意識を高めるとともに、教員としても受講者の関心の所在にそう方向に授業を展開できることである。

特に一般参加者むけに有効であると感じられた。その一方でこの方法の短所は、どうしても話題が拡散してしまい、予定した内容を時間内に消化できなくなってしまうおそれがあることである。そのおそれは現実化した。といっても、今回の場合、はじめから確固とした内容を完結まで練り上げていたわけでもなく、思想史の現場作業と一緒に体験できればよしと思っていたので、私自身はあまり気にしていない。

問題であったのは、やはり一般参加者と学生との間の目的意識の隔りである。学生による授業評価アンケートの自由記述欄に、このようなものがあった。

先生の話し方はとても聞きとりやすく、内容の流れもあり、おもしろい。「講演会」としてであれば大満足だが、授業としてはポイントがはつきりせず、頼りのレジュメもわかりにくかったのが残念。

この学生さんは割合きちんと受講してくれて、それなりに満足してくれたのだろう。それと同時に、学生としては期末試験と成績評価のことが気がかりな立場でもあろうから、大事な箇所を整理して解説してほしいという気持ちももつともである。こちらとしては連続「講演会」として成功すれば十分と考えていたのであるが、授業としては未熟だったようで、まことに申し訳ない。

ただ言い訳をさせてもらうと、いわゆる「ポイント」と瑣末な部分

とのどちらが大事で、また将来有益になるかは、歴史において一概に言えないものがある。むしろ人それぞれで何が大事か異なるかもしれない。だからこそ、授業の感想を交換し、様々な方向へ内容を展開させることが、単に前回の復習や補足にとどまらず、自分のこれまでの価値観を揺さぶり、本当の意味で比較思想をすることになるのである。

加えて、学生さんは東京女子大学で提供されている教育的配慮のゆき届いた授業に慣れてしまっているのかもしれない。それに引きかえ、こちらは「パワーポイント」も使わないし……。しかし開き直っていえば、わかりにくい話をわかりやすく咀嚼することも学問の訓練である。自助努力の余地があってもよからう。——とはいえ、ある一般参加の年配の男性から、私の授業後、「いまどきの大学の授業は、こんなにサービスがいいんですかあ〜！」と、からかい半分に驚かれたこともあった。私自身の感覚からしても、それなりにサービスしたつもりではいる。要するに程度の問題である。

下手な授業の弁解はそのくらいにして、コメントシートのやりとりの面白さは、例えば次のような感想が物語ってくれる。

どんな時代背景を背負って生きてきたかが、この講義の受けとめ方、理解の仕方の違いを生むのではないかと思われ、それだけに若い方々の講義への感想を伺うことも興味があります。殊に、人格形成にとって教育が果たす役割の大きさをいささか

も経験してきた者にとって、若い方々の受けとめ方は新鮮でもあります。
(一般Kさん。六月三日)

一般参加者と学生と両方が受講してくれる教室なればこそ実現する妙味であろう。

次のような感想もあった。

皇国少女として一途な毎日をはほ旧制女学校3年まで送ったのですが、当時『葉隠』を生きる指針として読むように指導、唱道されたのは、ただ「死ぬ事と見つけたら」のところだけ強調されたものだったかと、少々啞然とした気持ちです。幼かったとはいえ、きちんと読むことの大切さを思い知りました。

(一般Sさん。六月二四日)

これについて、若い学生さんから、

今日7月1日配布資料25頁、一般Sさんの「皇国少女として……『葉隠』を生きる指針として読むように指導、唱道された……」を読んで衝撃を受けた。実際そう指導された、ということも驚きですが、そのような教育を受けた方と今同じ教室で授業を受けているのか！というのが一番の衝撃です。

(3年Kさん。七月一日)

という一層の感想があった。コメントに対するコメントで、不十分なながらも世代間対話の真似事ができたかと思われる。

講義の進行は、最初に方法論として言葉の問題、そしてナシヨナリズムの象徴としての「桜」の問題を概観した後、何といっても武士道論の古典である新渡戸稲造の『武士道』を詳しく分析することにした(新渡戸稲造が創立に関わった東京女子大学でそうするのも何かの縁と思われた)。教材として、新渡戸稲造『武士道』(矢内原忠雄訳、岩波文庫版、二〇〇七年第九一刷改版以降)を各自で用意してもらった。教育研究支援課からは、同書の英語初版本の表紙(山桜と朝日があしらわれた)の複写など、重要な教材の準備について御支援いただいた。ここに記して感謝する。

加えて、近代日本のキリスト教徒と武士道論の関連として内村鑑三らもとりあげ、また国民道徳論の一表現として利用される井上哲次郎らの武士道論を扱った。国民道徳としての武士道論の双子の兄弟として、近現代の日本・東アジアで流行した陽明学にも言及した。

新渡戸の武士道論の学術的批判として、津田左右吉の議論を紹介した。これをふまえて、和辻哲郎と丸山眞男の武士道論をそれぞれの思想史講義から抜粋し、比較した。

その上で、江戸時代に遡って「武士道」という語をもとの史料で確認し、その意味の変化を簡単にたどった。もちろん、儒学者の議論も、『葉隠』も扱った。中世と近世の断絶も意識した。

次いで、武士を、個人としてでなく「家」として考えるため、日本における「家」観念と忠誠のあり方を、近隣諸国との比較の中で説明した。本当は西洋の騎士道との比較も深めたかったし、受講者からもそのような希望が出たものの、準備の難しさから、残念ながら今回は最小限の言及にとどまった。

残りの回で、近年の歴史学が解き明かしてきた江戸時代の武士の実際について、あれこれ概観しようとしたものの、兵学と儒学の関係を論じようとしたところで、例によって時間切れになってしまった。(未完で心残りのまま終わる方が、意欲の継続のためによいか?)

受講者の感想からは、私も様々なことを学んだ(歴史・社会の豆知識から、サザエさん家の謎やら銀座の中華料理店の情報まで!)。以後の自分の本務校での講義にも資するものがあつた。

東京女子大学 丸山眞男記念比較思想研究センター 公開授業
2010年度 受講者募集のご案内

東京女子大学では、丸山眞男並びに広く比較思想を講ずる科目として「比較思想」（半期完結）を設置しております。この科目は丸山眞男記念比較思想研究センターの企画により開講するものですが、2010年度は、前期に「比較思想」を開講し、学部学生と共に学外の方々にも公開いたします。下記の要領にて受講者を募集いたしますので、ご案内いたします。なお、後期の募集はありません。

○ 科目名：比較思想 **「武士道」の幻を追って**

○ 講師：中田 喜万 氏（学習院大学教授）

○ 授業概要

同じ言葉の中に様々な文脈の異なる意味内容が詰めこまれることがあります。抽象的な思想の言葉の場合、そうなりがちです。この授業では、そのような言葉の意味の混合を解きほぐし、仕分ける能力を養いたいと思います。それが思想を比較する前提となるからです。

例題として、「武士道」をとりあげます。近代によく知られた「武士道」とは別のものとして戦国時代のそれがあり、また中世から近世にかけての変容があります。しかも、それらが世界と隔絶した日本独自のものというわけではないことにも注意します。題材にそって、軍事と政治のあり方、また国家秩序と思想の相互の関わりについて、一般的に考えることもできたら、と思います。

まずは東京女子大学にゆかりの深い新渡戸稲造の『武士道』あたりから始めましょうか。

○ 教材

新渡戸稲造『武士道』（岩波文庫、2007年第91刷改版以降）を各自ご用意ください。

その他は適宜資料を配布します。

参考文献はその都度お示しします。

期 間 2010年4月15日～7月22日（全14回）

時 間 毎週 木曜日 4時限目（14:55～16:25）

会 場 東京女子大学（教室は当日正門付近の掲示板でご案内します）

対 象 原則として18歳以上の男女

定 員 30名

受講料 10,000円

テキスト代等は含みません。なお、一度納入された費用は返却いたしませんので、ご了承ください。

- 【申込方法】 下記の申込書にご記入のうえ、2月26日（金）までに教育研究支援課宛にご郵送ください（必着）。
- 【結果通知】 3月中旬までに結果通知はがきをお送りいたします。申し込み多数の場合は、抽選の上受講者を決定いたしますので、あらかじめご了承ください。
- 【受講手続】 受講を認められた方は、授業初日に受講料10,000円と結果通知はがきを会場にお持ちください。引き換えに受講証をお渡しいたします。
- 【ホームページ】 <http://office.twcu.ac.jp/facilities/maruyama/index.html>
- 【その他】 授業の単位は認定されませんので、あらかじめご承知おき下さい。

送付・問合せ先： 〒167-8585 東京都杉並区善福寺2-6-1
 東京女子大学 教育研究支援課「公開授業」係
 TEL: 03-5382-6454
 月～金・9時～17時（11:25～12:25を除く）

下記にご記入いただいた個人情報は、当該公開授業の運営及び当センターの行事案内送付のためのみに利用いたします。

----- キリトリ -----

2010年度 丸山真男記念比較思想研究センター公開授業 受講申込書

ふりがな 氏名		年齢		性別	男・女
住所	〒				
電話番号					
受講の動機					

東京女子大学 丸山真男記念比較思想研究センター